

(Daily 日本史) ～中世外交史～

【問】 2002 年 甲南大学 法, 経営

次の 1～6 の文章を読み、下線部(a～j)について、正しい場合には記号◎をマークせよ。誤っている場合には、後の語群から正しい語を選んで、その記号をマークし、また、正しい語が語群にない場合には、記号×をマークせよ。

1. 894(寛平6)年に和氣清麻呂_aの建議などによって遣唐使の派遣が中止された。それ以降、10世紀の中期に中国でおこった宋とも正式な国交はひられなかったが、しかし、巡礼や仏法習得のために渡宋する僧もあったし、また、宋の商人も博多などに来航し、相互の交流は続いていた。宋の商人は、日本へ書籍・工芸品や薬品などをもたらし、かわりに金や水銀、真珠などを宋にもち帰った。11世紀に成立した『新猿楽記』には、宋の商人が欲する金をめぐって、金の産地であった「俘囚の地」(奥州)への関心が高まったことをうかがわせる記述がみられる。さらに高麗との関係においても、1019(寛仁3)年、回族_bと呼ばれる沿海州地域の女真人が対馬、壱岐や肥前、筑前などの九州北部沿岸を襲う事件がおこったが、高麗は日本人の捕虜を保護・送還してきた。しかし日本と高麗との間に国交が開かれることはなかった。このように、正式の国交は結ばれなかったが、相互の往来は続き、11世紀の後半期になると、日本人で高麗に渡り、現地で交易する者も増加していった。また契丹との間でも、大宰権帥藤原伊房のように私貿易を行う者があらわれてくる。
2. 日宋貿易のルートは、通常、杭州や明州から鹿児島の方津へ至り、さらに博多を経由して瀬戸内海へ入るコース、あるいは揚州から済州島を経て博多に至り、瀬戸内海へ入るコースなどがあった。いずれの場合にも、瀬戸内海は日宋貿易の重要な海上交通路であった。日宋間の交易頻度が高まっていく12世紀の初期ごろから、瀬戸内海海域には多くの海賊が発生する。平氏は、1135(保延1)年に平忠盛が「海賊追捕使」になるなど、こうした海賊の追捕を通して瀬戸内海海域における交易を支配していく。平清盛が、12世紀の末に、摂津国の音戸_c泊、播磨国の魚住泊などの港湾の改修や修築を行ったのも、宋船の入港をはじめ、瀬戸内海海域における海上交通路としてのシステムを確立するためであった。
3. 13世紀の初期ごろから高麗の南部沿岸地域などでは倭寇が出現するようになる。肥前の松浦党も、しばしば高麗に進攻するなど、旧来の交易システムは不安定化していく。さらに日本と元との関係も、2度にわたる元寇にもかかわらず、また国交も結ばれなかったにもかかわらず、相互の交流は続いていく。また、北方のアイヌ社会でも、元寇の後、1308年にアイヌが元に毎年、毛皮を貢納するという関係が成立する。とくに日本と元との関係の中で注目すべきことは、寺社造営の費用を捻出するための多くの造営料唐船が派遣されたことであろう。1325(正中2)年の南禅寺_d船の派遣をはじめ、関東大仏造営料、住吉神社造営料のための唐船の派遣、さらに、1342(康永1)年の足利尊氏による円覚寺_e船の派遣などと続いていく。

4. 14 世紀後半から 15 世紀にかけて、朝鮮半島や中国大陸の沿岸部での倭寇の活動は活発化し、元朝の支配を排して建国した明も、倭寇の禁圧と日本との通交を求めてきた。1401(応永 8)年に足利義満は、明との間に国交を結ぶが、3 年後に開始された日明貿易では、勘合による朝貢貿易のかたちをとっていた。しかし、この日明貿易も、15 世紀の後半期になって幕府が衰退するとともに、貿易の実権は、堺商人と手を結んだ山名氏_{f)}、そして博多_{g)}商人と結んだ大内氏の手に移った。この両氏の中国への遣使が、寧波で争う事件が 1523 年(大永 3)年に発生するが、その後、大内氏が貿易の独占を行った。しかし、16 世紀の半ばに大内氏が滅亡すると、この勘合貿易も断絶することになった。

5. 14 世紀の中期に発生した「庚寅の倭寇」以降、何度も倭寇の被害を受けた高麗は、日本への倭寇の禁圧の要求を繰り返し行うが、しかし、日本における南北朝の争乱の中で、その具体的成果はほとんど得られなかった。倭寇の撃退に功績のあった李成桂が、1392 年に朝鮮を興すと、日本とも国交を結び、貿易を開始した。この日朝貿易は、日明貿易とは異なり、幕府の他に守護大名、豪族あるいは商人も参加して活発に行われたが、朝鮮側は対馬の宗氏を通して通交の制度を定め、また貿易の制限を行う方針をとった。対馬の宗貞茂の死後、倭寇が活発化したため、朝鮮側が倭寇の本拠地とみなして、1419 年に対馬を襲う嘉吉の乱_{h)}がおこると、この日朝貿易も一時的に中断したが、16 世紀の初期までは続いていく。しかし、1510(永正 7)年に、富山浦(釜山)などに住む日本人がその特権を縮小されたことから暴動をおこす中先代の乱_{i)}が発生して以降、日朝貿易は衰退していった。

6. 文禄の役(壬辰倭乱)・慶長の役(丁酉倭乱)の後、途絶えていた日朝関係は、江戸幕府が対馬の宗氏を介して朝鮮人の捕虜の送還を行うことなどの事態の改善の努力を契機に、1609(慶長 14)年、己酉約条_{j)}が結ばれた。この条約にもとづいて、宗氏は毎年 20 隻の貿易船を出した。また、朝鮮は將軍の代替りごとに慶賀などの名目で日本へ通信使を送った。この朝鮮からの使節団には、学者、医師、絵師、舞楽師、曲馬騎士など多彩な文化人が含まれていた。江戸までの道中の宿泊地では、筆談で朝鮮の文化を学ぶ日本人も増え、また各地の文化にもさまざまな影響を与えた。岡山県の牛窓町に伝わる「唐子踊り」は、朝鮮風の衣装を身につけた 2 人の男の子の踊りであるが、これは通信使の一行が催した舞楽を学び伝えたものといわれる。こうした朝鮮通信使は、1811(文化 8)年まで続くが、この間、12 回にわたって日本を訪れている。

〔語群〕

あ. 藤原基経	い. 赤松氏	う. 文明の乱	え. 天龍寺
お. 菅原道真	か. 大輪田	き. 応永の外寇	く. 三浦の乱
け. 尼子氏	こ. 渤海	さ. 京都	し. 壬申約条
す. 斯波氏	せ. 難波	そ. 刀伊	た. 細川氏
ち. 平戸	つ. 建長寺	て. 壬午軍乱	と. 鞆の浦

【解答】

a) お b) そ c) か d) つ e) え

f) た g) ◎ h) き i) く j) ◎